

## うらかな日仏交流牧場を夢見て

アンベール-雨宮 裕子

(フランス、レンヌ第2大学日本文化研究センター所長)

### 初めに

3月11日、あの日から私たちの暮らしは大きく変わった。突然、大地を揺るがした地震、思いがけず見えてしまった放射能の脅威。静かに刻まれていた時は、あの日から、死への道のりの尺度となって、私たちの体内に累積放射線量を加算し続けている。

日本とフランスを研究のために往き来していた私の生活も、あの日を境に一変した。命と景観と地域社会を守り支える家族農業が、原発の事故で、無残に崩れて行くのを目にしたからだ。自然の力で土を肥やし、手をかけて安全な農業を志向してきた農家ほど、受けた打撃は大きかった。「広島を経験した日本人が、なぜ原発を止められなかったのか」<sup>(1)</sup> 無念さと怒りに心を砕かれ、自

死を選んだ農夫に、どんな慰めがあったろうか。

私は、2004年9月にフランスで「安全な農産物の産直による村おこしの可能性」の研究プロジェクトを立ち上げ、日仏40名の研究者と実践比較研究に取り組んできた。事故が起きたのは、その成果を2冊目の本にまとめ、一区切りつけた満足感に浸っていた時だった。震災のニュースをパリで聞き、東京にどんな異変が起きているのか、不安な気持ちで戻ってきたのは14日の早朝だった。

福島原発事故は、消せない染みを大地に残し、生と死を放射能の天秤にかけながら、我々一人一人に、「生きることの意味」を問うてくる。家族農業を支持し、都市と農村の産直交流に、持続性のある農業の発展を見てきた私に、原発の突きつけた課題はとてつもなく大きい。原発が過疎の辺境に雇用を生み、村の暮らしを支えてきた事実があるからだ。高齢化が進む農村に、有機農業でどれだけ若者をつなぎとめられるのか。原発マネーの恩恵を受けては、事故で被災していても、うっかり「脱原発」など口にできない。

けれど、命より尊いものがあるだろうか。

ここに記すのは、震災の日から、私が日本とフランスで展開してきた福島の被災農家の支援活動の記録である。消してはいけない記憶が、時間と共に虚ろになる一方で、支援活動は思うように進まない。そんな私の思考錯誤の日々から、「命の重みと生きることの意味」をめぐる、日本とフランスの市民意識の違いが、浮かび上がるはずである。



写真1 2006年5月福井で田植え体験をするフランスの研究グループ

## 地震のあった日

震災のニュースを聞いたのはパリ。主宰していた日仏共同の産直研究が、「Du TEIKEI aux AMAP」(提携からアマップへ)という本にまとまり、レンヌ大学の出版局から出たところだった。5年に渡る研究プロジェクトを終了し、日本へ来ていた私たち<sup>(2)</sup>だが、参加してくれた仲間たちが記念の会を設けてくれることになり、3月の初めにフランスへやって来ていた。日本へ帰るのは、13日の予定だった。

11日の金曜日、朝起きたら、ラジオが日本の大地震のニュースを繰り返していた。震源は仙台の近くで、死者は百人程度。「すごい揺れで、恐ろしかった」と、東京在住のフランス人記者が電話で報告している。けれど、東北の被害状況はまだ掴めていないらしい。夫は、すぐに東京の日仏会館に電話を入れた。幸い、建物に被害はなく、本棚の本が落ちた程度とのこと。でも、余震が続いているという。

翌12日、フランスのメディアは、日本の震災を、まだトップニュースで流し続けている。フランスと日本の時差は7時間、日本が7時間進んでいる。余震が続き、被害規模を把握できない様子がやっと見えて来る。ラジオには、仙台に住むフランス人が呼び出されたり、パリの日本研究者が登場したりして、解説をするのだが、さっぱり要領を得ない。「日本はアメリカに救援を求めたそうだが」というジャーナリストの質問に、サブレ氏が「変ですね。日本は今、アメリカの傘下から抜けようとして画策しているはずですよ。どうしてアメリカに応援を頼んだりするのでしょうか」と答えていた<sup>(3)</sup>。死者、行方不明者の数がぐっと増えたのは、夜になって、津波の被害情報が入ってからだ。でも、この日原発の事故についてのニュースはなく、13日の朝、「飛行機は飛ぶのだろうか」と、地震の被害ばかりを心配しながら空港へ向かった。

ドゴール空港の日本行き便のカウンターは開いていて、飛行機は定刻に離陸した。日本へ向かってはいるものの、着いた先に何が待っているのか見当がつかない。機内はとても静かだった。食事が済んでしばらくした時だったろうか、パイロットから思いがけないアナウンスがあった。「私は神戸で被災しました。大勢の方が亡くなって、私も、とても大変な思いをしました。今回の震災でも多くの犠牲が出ています。皆さんも、お身内の方のことをさぞ心配なさっていらっしゃるでしょう。震災の被害者のために、全員で1分間の黙とうを捧げましょう。」パイロットは、震災の直後にパリへ飛び立ってきたのだろう。私たちの知らない情報を持っている。彼の申し出を、我々は身の引き締る思いで受け止めた。「どうやら日本は大変なことになっているらしい」。

14日の朝7時、羽田空港に到着。「らしい」がすぐに現実になった。スーツケースの宅配サービスは、地震の影響で、いつ配達できるか分からないという。とにかく預けて、JRで大磯の自宅へ向かった。途中、車窓から目を凝らす。倒壊した建物は見えないが、安心していられたのは横浜駅までだった。計画停電が始まって、東海道線は横浜より先へは進まないという。朝9時の横浜駅には通勤客の長蛇の列ができていた。京急線へ乗り継ぐ人、バスやタクシーの前に並ぶ人、列はどんどん長くなって人があふれ、異様な光景になっていく。我々はタクシーを待つ長い長い列の後ろに連なって、乗車拒否に合わないことだけを祈って番を待った。大変な事態なのだが、通勤客は会社へ向かう足を止めようとはしない。ケータイで遅刻を伝えたり、待ち合わせを変更したりしながら、みんないつものように都心へ向かっていく。わめく人もいなければ、列を乱す人もいない。黙々と人の群れが動いていく。

1時間近く待ってやっと乗れたタクシー。相模湾が窓から見渡せる、ひなびた我がマンションに

辿り着く。室内には何の被害もなく、すぐに電話をした船橋の母の家も、仏壇の花瓶が落ちて壊れただけだと、笑っていた。大磯の町はいつもと変わりなかったが、JRが動かないのでは、夫は仕事場の日仏会館へは行かれない。家であちこち電話をして初めて、大使館がフランス人の在留者に避難勧告を出していたことを知る。メールを開けてみたら、「余震が続くこと、福島原発が危機的状況にある可能性を否定できないことから、東京にどうしてもいなければならぬ人以外は、関東を数日離れていたほうがいい。フランスから来日するのも止めた方がいい」との連絡が、13日の夜、大使館から在留フランス人にあてに送られていた。我々が、パリで飛行機に乗ろうとしていた時のことだ。日仏会館のフランス人研究者たちは、みな京都以西に避難していて、大使館で働く人たちも、この日は自宅待機となっていた。ヨード剤は、14日にフランスから持ち込まれ、領事館経由でフランス人に配られる手はずになっていた。

この後、日仏会館では、しばらくフランス人の講演活動が出来なくなる。研究者の来日が次々にキャンセルになったからだ。大学や国立の研究機関で働くフランス人には来日の許可が下りず、7月の初めに予定していたレンヌ大学の友人の「ブルターニュのジャポニスム」に関する講演もキャンセルになった。日本に留学していたフランス人学生たちは、祖国に呼び戻され、軍用機も出動で、フランス人家族の帰国が急ぎ手配された。片道切符はもらえても、事態が収束して日本へ戻る時は、自己負担となる。学生たちは躊躇し、そのまま留まった者もいれば、留学期間を繰り上げて帰国してしまった者もいた。レンヌ大学では大学間協定の枠で日本へ留学する学生がここ数年10人近くいる。2月が選考会で、東北大や早稲田など、志望校別に留学予定者が決まっていた。けれど、原発の事故があってから、沖縄志望の生徒以外、みんな留学をキャンセルしてきた。

### 農業を脅かす TPP

15日の早朝、大磯町の広報車が福島原発事故の影響で計画停電があること、JRは4割運転であることをアナウンスして行った。夫は大使館と連絡をとって、とりあえず日仏会館のフランス事務所主催の行事を22日まで中止にした。所属の国立研究機関 CNRS から、費用は負担するからフランスへ帰ってくるようにとのメール。東京のフランス大使館からは、連絡を取りつつ、自己責任で行動をするようにとの指示が来る。

私は16、17日と福井県の芦原温泉で「田舎のヒロインわくわくネットワーク」<sup>(4)</sup> という農家の女性たちのNPOの集会に参加する予定だった。農産物の貿易自由化を促進する TPP (Trans-Pacific Partnership) 協定にどう対処するかがこの集会の大きなテーマで、農業を営む女性たちには切実な問題だった。TPPは日本の小規模家族農業には、壊滅的打撃を与える危険な交渉だ。農産物はモノとして扱われてはならない。なのに、この協定が政府で取りざたされるようになってからも、農業者の怒りの声がなかなか聞こえてこないのが気になっていた。これが、私が暮らしたブルターニュ地方なら、県庁に農家が押し掛けて大変な騒ぎになっているだろう。なにしろフランスの農家の意思表示は強烈で、道路をトラクターの隊列でストップさせたり、値崩れの野菜をぶちまけたり、市民の生活にも、即、影響が出る。

そんな折に開かれるのが、「田舎のヒロイン」の総会を兼ねた集会だ。お母さんたちに声を上げてもらう絶好の機会になる。準備会から相談に加えてもらい、事務局のメンバーたちにフランスの農村事情や、産直運動の話などを事前で得ていた。フランスでは AMAP (農民農業を支える会) の産直運動が2001年の春から急速に発展してきている。農業人口が年々減少して<sup>(5)</sup>、生産者自身も農業の工業化、集約合理化に危惧を抱いているからだ。日本の農業は高齢の兼業農家

が支えている。農業を生きがいに一生を貫く人たちがいるから、田んぼのある村の景観や、幾重にも広がる棚田が維持されてきたのだ。それが、国際価格競争に巻き込まれたら、どうなるのだろうか。急がないと間に合わない。農業に取り組む女性たちに、自分の生活がかかっていることを自覚して欲しかった。お父さんたちを差し置いてでも、女性の農業者に立ちあがって欲しかった。だから、何としても、この集会に参加したかった。

「フランスへ避難するのは後回しにして、とにかく福井へ行こう。」結論はすぐ出たが、余震の続くなか、目的地まで無事に辿りつけるかは定かでない。4割運転のJRが、途中で止まってしまうかもしれないのだ。行こうか、行くまいか、迷っていたのは私だけではなかった。主催するヒロインの事務局も、集会を中止にするか何度も話し合っていた。遠くから出て来るメンバーの安全をどう確保すればいいのか。最終的に、「こんな時だからこそ、やっぱり集まろう」と、会長の洋子さんが断を下した。

我々は15日の昼過ぎに大磯を発って、夜の8時に福井駅に到着。準備をしていた地元のメンバーたちが、暖かな夕食で歓迎してくれた。この日、大使館の情報では、東京は昼過ぎから福島放射能雲の汚染域に入る。自宅待機がよしとされていた。風向きはどうだったのだろうか。福井は原発だらけの県だ。敦賀の原発から風が吹く方向に沿って、がん患者が多いと言う。けれど、それをどう証明すればいいのか。原発事故のひき起こす災禍は異様だ。死を招く放射能が周りに満ちていたとしても、見えず、聞こえず、感じとることさえできない。おまけに、被曝から死出の旅への道程は、個体差が大きく、言ってみれば‘くじ運’次第。我々が共有する事実は、福島事故があっただけから、もう2度と同じ空気を吸うことはできないということだ。今、生きて在るものは全て、汚染された空気と水と大地を受け入れて、一生を終える

ことになったということだ。

ヒロインの事務局では、集会を緊急集会に変更し、TPP問題よりも原発に視点を据えて、みんなで討論することに決めていた。福井県には15基の原発があり、そのうち13基が稼働中だ。敦賀に第一号が建設されたのは1970年のことで、その時は、アメリカの技師たちの到来を沿道で旗を振って迎えたとき、当時中学生だった友人は言う。彼女の父親は原発に職を得、自分は敦賀に住んだが、家族は危険だからと福井市に住まわせていた。15基の炉の内、最も危険性が高いのはMOX燃料を使う高速増殖炉の「もんじゅ」だ。「もんじゅ」は、1991年に試運転を開始以来、ナトリウム漏洩事故や放射性ガス探知機の誤作動、更には、燃料棒の交換用中継装置の炉内落下など事故が続き、現在運転を休止している。山崎夫妻のような農業を仕事とする人たち、環境問題に関心を持つ人たちは、福島事故を「明日は我が身」と感じて、緊張感を高めていた。

### 「田舎のヒロイン」の緊急集会

16日の朝、会場の芦原温泉のべにや旅館には、各地から80人近いメンバーが到着。地元の参加者も多く、大広間がいっぱいになった。会長の山崎洋子さんが「食と農から世界の中の日本の未来を考える」という集会のテーマを、15基の原発を抱える福井だからこそ、一層深く考える時だと説明して行く。こうして始まった緊急集会だが、やはり参加者の気持ちは福島原発のこと。いったいどれくらい危険な状況になっているのか、情報が少なく、事故の全容が掴めない。その時、福井の原発に詳しく、脱原発運動30年の山崎隆敏氏が福島事故の説明を始めた。彼は20年前にベラルーシへも援助物資を届けに行っていて、原発問題を取り上げた数冊の著書がある。その山崎隆敏氏が自分の著書の一説を読みだした。

「ベラルーシから帰国したその週の日曜日、甥



と二人で、自転車で近在の森へ鳥を見に出かけました... はるかに繋がる峰々を眺めながら、私はいつの日か、ガイガーカウンターを持った人々が、外国から来訪し、この豊かな自然の全てが放射能で汚染されるなんて、と慨嘆する、そういう日がいずれ来るのであろうかと想像しました。そのように思うと、この森の中の命が無性にいとしく感じられてなりませんでした」

そこまで読んで、氏は声を詰まらせた。そんなことはあるまいと思ひながら想像したことが、現実になろうとしている。「福島はこれから50年は帰れない土地になるのではないかと、氏は懸念する。放射能の破壊力は、レイチェル・カーソンが『沈黙の春』で描いて見せた農薬禍の惨状をはるかに超えている。敦賀の原発銀座の地下には活断層があるという。福島の悲劇は、明日の福井の姿かもしれない。目をそらしたくなる事実、参加者の表情が暗くなる。

ここで無気力になってしまうのは危険だ。どんな状況にあっても私たちは生きていかねばならない。一人でも出来ること、やらなければならないことがある。私は、自分で考えて行動することの大切さと、市民としての責任意識を持つことを訴えた。

一集団の中であって安らぎを覚える日本人は、己を制御して思考の回路を開かない。それが習慣になると、自分で考えて行動することは、あるべきふるまいに思えてくる。私自身、この習慣の中で育ってフランスへ留学したので、フランス人の問いかけに、最初は多に戸惑ったものだ。些細なことでも、聞かれるたびに「それを考えたことのない自分」に気づかされる。たとえば宗教だ。「あなたの宗教は？」と聞かれて、「別に」とは答えられない。「神を信じるのか、信じないのか」そのどちらであれ、「選択にはそれなりの理由があるもの」と、彼らは考える。ところが、神でも

仏でもキリストでも何でもよしの、私のような日本人には、答えようがない。なにしろ考えたことがないのだから。日本では「あいまい」がよかった。境界をぼかしておいた方が、何事も無難で、生きやすかった。

ところがフランスでは、そうはいかない。大人も子供も自分の権利を主張するし、まっとうな主張なら、周囲が受け入れる。フランスの若者は18歳で成人し、選挙権を得る。だから、高校生でも社会問題に関心が強く、文部省が意に添わない高校の改革案を出せば、各地でストやデモが繰り返される。教師や父母と並んで、彼らも隊列に加わる<sup>(6)</sup>。「政治が悪い」と不満を漏らすだけでなく、ならば自分たちが動いて変えさせようという論理の展開になるのだ。日本では、政治を政治家任せにしてしまう。選挙が済んでしまえば、市民は自分の役割は終わったと感じて、成り行きを見守る傍観者の席に甘んじてしまう。政治家を信頼し、その采配を支持しているのであればまだしも、大概は政治に期待も持っていない。その時、市民としての社会的責任はすっかり忘れられている。この概念は、日本ではまだあまり馴染みのない考え方なのかもしれないが、今こそ市民として自分は何をすべきか考える時なのではないか。一

会は午後8時に一度終了し、夕食後、被災地支援についての話し合いがもたれた。メンバーの心が揺れている。支援と自分の生活の両立が出来るだろうか。もっとインターネットを活用しようという提案が若手のメンバーから出る。でも、インターネットなんてやったこともないという熟年のメンバーも多い。手書きのヒロイン通信では、郵送に手間がかかり過ぎ、緊急事態に対処できない。決め手になる案がないまま、午前1時にひとまずお開き。

翌朝、「今私たちに出来ること、ヒロインでできること」と題して、再度話し合い。ヒロインの

メンバーは全国に散らばっていて、もちろん被災県にもいる。その人たちをどう支援すればいいのか。義援金を集めるとか、受け入れ窓口をつくるとか、大枠の案が出る一方、被災者のホームステイは、長期になると受け入れる側もお世話になる側も疲れて負担になるので、1カ月から3カ月に期間を限った方がいいという具体案も出て、議論がなかなかまとまらない。「ヒロインのグループならではの支援活動はないのか」というこだわりや、「TPPに対抗するような農業支援にしよう」という思いが、ハードルを高くする。畑仕事に精を出しながら動ける女性はそうそういない。支援については、原発がこれからどう収束するのか、状況を見ながら各人で取り組み、その情報を交換し合うということに落ち着いた。

#### チェルノブイリの汚染雲

福島原発事故で一番に引き合いに出されるのは旧ソ連ウクライナ共和国のチェルノブイリだ。原子炉が爆発したのは1986年4月26日（土曜日）



写真2 福島チェルノブイリを描いた脱原発デモのポスター

のこと。大量の放射能が放出され、最初の放射能雲は西から北西方向に流され、ヨーロッパの各地に多くの被害を及ぼした。

あの日、私たちは友人の家族とレンヌ市近郊の森へ、ピクニックに出かけていた。私は生れてまだ半年の息子を腕に抱き、友人のところも幼い娘を二人連れていた。お天気はまずまずで、森の一角にシートを広げて、タルトやサラダや飲み物を並べ、おしゃべりをしながらのんびり遊んで帰った。その晩、事故を知り、月曜日を待ってすぐに「緑の党」の事務所に駆けつけた。放射能情報を得るのに、どこへ行けばいいのか分からず、「緑の党」ならと思ったからだ。事務所で対応してくれた男性は、「チェルノブイリの放射能雲の影響は？」という私の質問にげんな表情で、「別に何も聞いていませんが」と言うだけだった。無理もない。当時、フランスでは情報隠しが行われていた。フランス放射線防護中央局（SCPRI）の局長、ピエール・ペルラン教授は、4月30日に、「フランス国内では放射性物質による汚染は無く、健康への影響は無い」と発言し、5月1日には「ヨード錠剤を飲むには及ばない」との通達を出している。放射能雲の通過で、フランスのほぼ全域が、放射濃度の上昇を記録し、それをSCPRIに報告していたにも関わらずだ。6日、農水省は「フランスは距離的に離れていることもあり、チェルノブイリの原発事故による放射性降下物からは、いかなる影響も受けていない」と発表し、農産物の放射能汚染を否定するだけでなく、国民にやら予防勧告をしていない。ペルラン教授は5月10日には放射濃度の異常な上昇があったことを認めるが、それでも、防除対策は特に必要ではなかったと言いつける<sup>(7)</sup>。国の情報隠しを危惧した市民は、すぐに自分たちの手で放射能情報を管理するNPOを立ち上げた。それが、同年の5月15日に成立した放射能の自立情報リサーチ委員会（CRIIRAD）<sup>(8)</sup>である。委員会には放射能関係の

機関で働くエンジニアもいて、確かな知識に裏付けされた調査が、自主的に続けられてきている。

福島原発事故で、線量計が国内で手に入らず困っていた時に、最初に手を貸してくれたのはこのCRIIRADだった。CRIIRADの援助で私は線量計を入手し福島の農家や、地方の市民団体に届けている。同じころ、岩田氏は友人たちと「市民放射能測定所－CRMS」<sup>(9)</sup>を立ち上げ、やはりCRIIRADの協力で、線量計を入手し福島を初め各地で、放射線量を自分たちの手で観測し始めた。CRIIRADのメンバーは岩田氏のグループと福島へ足を運んで、現地調査を行い、その結果を公表している。フランスの市民の迅速な動きと、自主防除の姿勢には学ぶところが多い。岩田氏のグループも当初から在日のフランス人研究者をメンバーに含んでいて、設立の理由を「自らが自らを守るための測定を行い、放射線防護の知識を身に付け、各個人が自ら判断するための“道具”を提供する」としている。

少ない線量計を出来るだけ有効に使えるように、私と岩田氏は協力しながら観測を始めている。測定には定点観測が望ましく、観測場所の状態も記録しておく必要がある。コンクリートの上と土の上とでは、同じ場所でも数字の出方が違う。地面で計るだけでなく、我々が息を吸い込む空中での測定も必要だ。4月26日、福島の農民連が東京へ出て来て農水省と交渉をすることがわかった。それなら、その日に測定器の使い方を説明するからと、岩田氏も八ヶ岳からやって来た。初めての交渉で、気もそぞろな農家のおじさんや若者を数人、近くの神社の片隅に集めて、岩田氏が線量計の使い方を説明する。みんなで一緒に、確かめながら計測をしてみた。計器はRADEX。誤差があるので、4回計ってから平均を取る。岩田氏は計測記入表を作ってあり、そこに日時や計測地の状況を書きこむようになっている。その時出た数値が0.13sv/hから0.16sv/h。「ええ、東京で

もこんなに高いの？」一緒に来ていた下谷のお米屋さんが目をむいた。新聞に出ている放射線量測定値は0、0Xと一けた下だったからだ。彼はあれから慌てて線量計を注文し、地域のお母さんたちにも貸してあげて、線量の観測を続けている。

フランスに話を戻すと、コルシカ島の牝羊の乳に1リットルあたり1万ベクレルを超える放射性物質（ヨウ素131、セシウム137など）が見つかり、1986年以降、甲状腺異常が住民に増えていることが現地の医師らの追跡調査で明らかになった。チェルノブイリの放射雲が、フランスの上空を通過し、コルシカに深刻な汚染をもたらした事実が明らかになった。にもかかわらず、政府は国民に何の警告も与えなかった。2001年「フランス甲状腺病患者の会」が訴えを起こし、2006年には、ペルラン教授が重大な嘘について国民の健康を害したかどで起訴された。しかし、ペルラン教授は、この10月に免訴となっている。400人近くの甲状腺がんの患者を生んだと言われる<sup>(10)</sup>チェルノブイリの原発事故。フランス政府は、SCRPIの所長を擁護して、自らの責任を回避した。甲状腺がんの増加とチェルノブイリの事故の因果関係を証明するのは、きわめて難しい。しかし、がんを発病して苦しみ、亡くなっていった人たちがいる事実は変わらない。福島で今、また同じことが起ころうとしている。

## 農場を探して

17日の夕方、福井から戻った大磯の家は停電だった。フランス政府はエールフランスの飛行機をチャーターして、17日に成田と関空から、自国民を帰国させている。東京には約六千人、関西には千五百人のフランス人がいるが、東京からは千人近くがこの便で帰っている。自主帰国した商社関係のフランス人たちと合わせれば、事故直後には、かなりの帰国者があったものと思われる。我々も18日の朝の便でパリへ戻った。飛行機は日



本の上空を避け韓国周りでフランスへ向かった事を後で知る。

フランスでは、新聞もラジオも日本のニュースで持ち切りだった。フランスの友人、知人たちから、安否を気遣うメールがどんどん届いたが、答える気にもなれなかった。

パリで最初に会ったのはジェロームだ。14区のAMAP（農民農業を守る会）のメンバーで、AMAPの国内連合であるMIRAMAPの代表だ。海軍の士官出身だが、環境問題に興味をもったのがきっかけで、農業がやりたくなくて陸に上がってしまった。現在は有機ハーブ園の経営を目指して農業研修を受けている。農場を探しているという彼に、被災農家を受け入れる農場の管理を試みる気はないか、訊ねてみようと思った。福井を出てからずっと考えてきたのは「どうしたら一人でも福島を救えるか。日本の農業を救えるか」ということで、もしかしたら、私にできるのは、老後住みたいと思っている農場を今から買って、そこへ福島の農家を受け入れることではないか」と、思いついたのだ。農場のイメージは、おぼろげに出来ている。広くなくてもいい。有畜多品目の複合農業がやれる農場だ。うらかな陽の光にれんげ草が揺れる牧場。りんごの木の下には、牛たちが寝そべって、中庭には石のパン焼き窯と、平飼いの鶏小屋がある。農耕馬や山羊のいる家畜小屋のそばには、大きな栗の木と榎の木があって、畑には、季節の野菜が並んでいる。そんなのどかな農場への夢がどんどん広がった。震災の猛威の対極にある、平和で穏やかな農場で暮らしたら、被災農家は、また立ち上がる元気を取り戻してくれるのではないか。フランスで、酪農や、チーズ作りを勉強して、辛い体験を、次へ飛躍する踏み台にしてくれればいい。農場さえみつければあとは何とかなるだろう。これが、私の中で描いた最初の支援シナリオだ。

ジェロームは、この話をにこにこして聞いてく

れた。ならば目指すのはブルターニュ。ブルターニュの田舎なら、広い庭付きの古民家が見つかるかもしれない。さっそくレンタカーを借りて、海辺の町カンカルを手始めに、不動産屋の物件案内を見て回った。ところが、農業をやっているようには見えない年配のカップルが、農場か、広い庭のある中古の家を田舎に見つけたいというのは、どこかおかしな買い物に見えるらしい。希望とはかけ離れた物件を紹介される。最初に見せてもらったのは、7haの馬の放牧場とプール付きの17世紀の家で、パリに住まいのあるお金持ちの別荘だった。広さはあっても、農場に変身させるのはとても無理。農家の友人が紹介してくれたのは、離婚する夫婦の財産分けの物件で、60haの牧場。でも、その農地には家を建てる許可が下りない。有機農業関係のアソシエーションが仲介してくれたのは、慈善団体が所有するお城。修理費用が膨大で、これも見る前に没。有機農家が一部を譲るといふ農地<sup>(1)</sup>も見たが、雨量の少ない痩せ地で、野菜作りには向かない。丸二日、車で田舎を右往左往したが、夢の農場は見つからなかった。そうそう簡単には見つからないということも、よく分かった。私は、農場を買う案をひとまず引っ返めて、知恵を絞直すことにした。

週末、レンヌ市の広場では、日本語補習校の先



写真3 レンヌ市の仙台支援募金活動



生や、大学で日本語を学ぶ学生たち、日本からの留学生たちが「助け合う」をテーマに募金活動をしていた。机を並べ、鶴の折り方を教えて、募金をしてもらう。テーブルには市民が大勢集まって鶴を折っていた。懐かしい顔があちこちにあって、10年前の教え子が声をかけてくれた時は心が和んだ。フランスの地方都市にも、日本の被災者を支えたい人の輪が広がっている。レンヌ市は仙台市と40年来の姉妹都市だ。ならば、行政が手を貸してくれるかもしれない。そう思って、さっそく連絡をとってみた。まずは市の国際交流課。責任者のデュ＝フランソワ女史とは、旧知の間柄で、仙台市との交流ではこれまで随分協力してきている。彼女はとても温かく励ましてくれた。義援金を持って仙台へ行くと言う。広場の募金活動はそのためだった。彼女にとって、福島は別問題で、頼んではみたが、被災農家受け入れの話は、現市長に取り次いでもらえなかった。そこで、先年まで5期市長を務めたエルベ氏<sup>(12)</sup>に面会を求めた。大学で夫と同窓だった人で、日本へも何度か来たことがあり、市長職を退いた今も、市内に事務所を構える国会議員である。ここでも、受け入れ牧場の実現に役立ちそうな援助案はもらえなかった。エルベ氏は震災の情報に詳しく、仙台の被害にとっても心を痛めていた。そして、日本の被災者の節度あるふるまいを、何より称えてくれた。

実際、フランスのテレビには、町を呑み込む津波と、列になって順を待つ避難所の人たちが何度も写されていて、「こんな状況でも」という前書き付きで、日本人の礼儀正しさが話題になっていた。怒らず、泣き喚かず、課された試練に耐え、運命を受け入れる日本人。日本人のあの「音無しさ」がフランス人には不可解に映る。発展途上国の難民が、援助物資を奪い合い、怒りや悲嘆をカメラにおちまけるのを何度も目にしているからだ。震災は本当は大したことなかったのではないかと思う人まであった。

感情の抑制は被災者のみに限らない。大江健三郎は、震災に打撃を受けた日本人の間に漂う静けさを、個人の深みに根ざした「喪」の感情と捉え、人であれば必ずそこから立ち上がる日が来ると期している<sup>(13)</sup>。一方、池澤夏樹は、日本人は自然の災害に常に曝される国土にあって「諦めることの達人になった」と考える。それが、あるがままを受け入れる姿勢となるのだ<sup>(14)</sup>。確かに、天災は人の力を超えている。全てを失えば、また一から積み上げて行くしかない。けれど、福島は人災だ。原発は人が作った怪物で、永遠に消せない毒を吐く。人災を怒らなければ、過ちは正されず、また何度でも繰り返される。毒に一番弱いのは、未来の命を生みだす母と、その幼い子供たち。「原発から子供たちを守れ」という声が上がらない日本はやはり不可解だと思った<sup>(15)</sup>。

### 被災農家支援プロジェクト その1

一人では無理、お役所は融通が利かない。途方に暮れている私に、フランソワが知恵を貸してくれた。彼は、弁護士を定年退職していて、地元の名士に知り合いが多い。その人脈を活かして、色々な人物にあたってくれた。その人たちに会って、支援計画を説明するうちに、私の頭の中にこれなら出来そうだという試案がまとまった。それを「被災農家支援プロジェクト」と名付けて、メールであちこちに送ってみた。

日本－ブルターニュ交流牧場の開設プロジェクト（和訳）

「東北地方の中心都市仙台は、レンヌ市と姉妹都市関係にありますが、その沿岸一帯の農村は地震と津波の被害だけでなく、福島原発事故による放射能汚染の被害も被っています。東北地方の、農業被害総額は250億ユーロと推定され、今なお行方不明者が数千人いる状況です。被災者は避難所に収容されていますが、農家は春の種まき

の時期を前に、苦悩と落胆の日々を送っています。塩害、地盤沈下、水路の崩壊でお米が作れなくなった農家がある一方で、より深刻なのは、福島原発の近くに住む農家たちです。土と共に生きる農民にとって、その基盤を汚染された今、どう生活を立て直していけばいいのでしょうか。

被災農家に少しでも希望を与え、生活再建への手助けとなるプロジェクトができないかと考えたのが、この日仏交流牧場の計画です。東北地方で被災した農家をレンヌ市近郊の農場に受け入れ、その農場をブルターニュと日本の友好と連帯を深める拠点にします。交流農場で、日本の農民は有畜多品目栽培の取り組みや、パンやチーズ作りを学びます。酪農は、日本ではまだあまり発展していない生産活動です。その体験は日本の被災農家にとって、有意義な学びになるのではないのでしょうか。また、りんごの木の下で牛が草を食む牧歌的世界の平和は、震災から立ち直る心のケアにも繋がるでしょう。無からの出発には、学びこそ力の源泉です。ブルターニュの農民は日本の農民から、日本の野菜や米作りを学びます。農業を基盤に、伝統工芸や食文化など、多様な交流の企画が可能で、和食が健康食として好評のフランスでは、日本の米や野菜は、歓迎されるはずで、交流牧場を、福島教訓を忘れずに、日仏の市民が集い、学び、楽しむ、交流の場として発展させて行きましょう。

有畜複合農業で、野菜作りに力を入れている農場が受け入れ先になってくれるのが一番です。そうすれば、すぐに被災農家がやって来られます。日本からやってくる被災農家の滞在期間は、本人の希望次第です。短期の研修滞在でもよし、あるいはブルターニュに移住するための第一歩でもいいと思います。10haの農地に、交流広場、カフェレストランのある牧場が目標です。近くに10人前後の研修農家の住居を確保します。初めは、フランス人の農業指導員を2人、農場の管理運営責任

者を一人、事務を一人で始動し、広場やカフェレストランなどを、順次計画して行ければいいと思います。

私は2003年から丸6年ブルターニュと日本で、安全な農産物の地産地消の推進に取り組んできました。この実践研究は、ブルターニュ地方振興研究基金を得て、日本とブルターニュの、40名以上の研究者や生産者が協力してくれました。その貢献をもとに、2冊の本を上梓しています<sup>(16)</sup>。2008年10月に東京の日仏会館へ赴任してからは、日本の仲間と研究活動を続け、日本の農業や産直運動関係の人たちと、いろいろな交流があります。

日本の被災農家の方々に、支援は国内に留まらないことを知っていただきたいです。日本で、農業が後回しにされるのも、原発がここまで生活に入り込んでしまったのも、経済効率を優先する社会があるからです。それは、日本だけの問題ではありません。フランスの農業も工業化、集約化が進み、家族農業が消えていこうとしています。だからこそ、この試練を契機に、両国で、支え合い、助け合い、学び合う農民交流に取り組みましょう。このプロジェクトは、人の輪を世界に繋げる試みの第一歩です。」

このメールを、ブルターニュの産直研究で知り合った仲間や、エコロジー関連のアソシエーションなどに送り、その転送を頼んだ。真っ先に答えてくれたのは、ブルターニュで初三ツ星をとったレストランのシェフ、オリヴィエ・ロランジェ氏だ。カンカルの港町にある氏のシャトー・レストランの隣の有機の農地を3、4ha貸してくれるという。その近くに大規模な有機野菜の栽培農家があって、そこでも3ha借りられるそうだ。ロランジェ氏は11月に日仏会館で行った「味を育て、地域を育む」というセミナーに招いたばかりだった。ブルターニュでは地産地消の旗手として



写真4 3つ星シェフ ロランジェ氏

知られ、自分の菜園に昔のりんごを復活させたり、地元の食材しか使わないことで有名だ。それだけ、地域の生産者との付き合いは深く、2006年に3つ星をとったレストラン「ブリクール」は、カンカルの町の名を世界中に轟かせて、地域の活性化に貢献している。彼には、日本の米の旨さと、土鍋で炊く方法を伝授しておいた。だから、もし農場で米作りが始められたら、彼のレストランで使ってもらえるかもしれない。フェアトレードを実践して、マダガスカルやインドへ足を運んでいる彼の支援は、何よりも心強い。

ブルターニュ北部の海岸一帯は、昔から野菜栽培が盛んで、アーティチョークやエシャロット、カリフラワーの生産では国内随一である。ロランジェ氏が紹介してくれた野菜の生産組合は、常時20種ほどの野菜を生産していて、人手不足で困っていた。日本から労働者が来てくれれば、フランス人と同じ条件で雇用できるという。半年でも、一年でも、百人は雇用可能とのこと。労働ヴィザの問題があるにせよ、何か道が開けるかも知れない。組合は種を自主管理していて、日本とはエシャロットの取引がある。農業試験場が数か所あるので、日本の野菜の試験栽培をしてみてもいいと、組合長のゴヴァン氏は前向きに話を進めてく

れた。この辺りの農地からは大西洋が見渡せる。海に見える畑で、金時人参や小松菜を作ってみてはどうか。自分が畑にしゃがんでいる姿を思い浮かべながら、そんな可能性も考えてみた。

フランスワの知人でレンヌ市内に配られる広告紙7JOURS（7日間）の社長は、次の週の新聞に、福島農家支援の呼びかけを載せてくれるという。さっそく、事務所へ会いに行き、話を聞いてもらった。この社長、実はジャーナリストとして駆け出しの頃、仙台にいたことがある。当時、日本人のスチュワーデスの恋人がいて、仙台の思い出は、彼女との思い出に等しく、震災のニュースに是非何かしたいと思っていたそうだ。4月4-8日号に載った被災農家への支援呼びかけは、何故か「仙台の」被災農家を助けようになっていたが、一人でも多くの人にメッセージが伝わるのは有難かった。

同様に、INRA 国立農業研究所を定年退職して、Agro sans frontières〈国境なき農業〉という、アソシエーションの会長になった、ジュアン先生の支援の約束も有難かった。ジュアン先生は、開発途上国の農業指導に忙しく動き回っている。農家に生れ、子供の頃は土間家に住んでいたそうだ。永年研究してきたのはじゃがいもの品種で、マリで栽培指導に成功したことをとても嬉しそうに話してくれた。有機農業にはずっと関心があり、推進すべきだと思っていたが、それを研究所で言えたのは、定年間近で、キャリアに問題がないところまで来てからだ、すまなそうに言う。フランスの農業大学でも、有機農業はまだまだ市民権を得ていない。ジュアン氏は米栽培については知識がないと言うが、ブルターニュでの栽培実験を無理だとは決めつけなかった。

日仏交流牧場の話は、メールを見たフリーランスの記者が、イル＝エ＝ヴィレーヌ県の5-6月号に取り上げると連絡をくれた。この雑誌の裏表紙に載った顔写真入りの呼びかけは、大勢の人

の知るところとなって、メールでの問い合わせや申し出がぐっと増えた。それで思いがけず、ブルターニュに在住する日本女性たちを発見することになった。家の息子の嫁は日本人だとメールをくれた有機農家。日本で農業研修をしたことがあって、妻は日本人だと言う生産者。直接メールをくれた日本女性もいて、被災農家支援が、ブルターニュ在住の女性たちを引き合わせるきっかけとなった。その中の一人、甲状腺の病気をもつEさんはこんなメールをくれた。

「... フランス人男性と結婚してこちらに住み始めました。なので、生粋の日本人です。37歳です。子供は持病があるため、いません。日本の実家は祖父がりんご農場をやっていました。長野の実家に畑と田んぼがあるので、それを手伝うという程度のことを小さいころからしていました。小さいころからきのこ、山菜取りへ行ったりした、などという経験から、自然農に大変興味がありました。持病があるという経験も自然農がしたいというきっかけです。それで、去年 ANPE を通して、二件の有機農家でスタージュさせてもらいました。日本に帰ったとき、自然農をしている方に出会い、その方からも色々教わりました。そこで自分の計画が見えてきたので、自然農を始めることにしました。Le Rheu にある有機農業の Formation の登録もしましたが、フランス語で専門用語がたくさんあるので、まず最初に、農家でしばらく仕事をしながら専門用語などを習得してからにするつもりです。それと同時に、自分の自然農ので独立するという計画も進めています。裕子さんのように、日本の野菜を作りたいのです。しかし、日本の種などでこちらで販売できるのかなどなど、法律上分からないことがたくさんあるので、新規就農者の独立を支援する農業専門のアドバイザーの方に質問などを提出しています。手始めに、建築最中の家の土地の半分を使っ

て、自然農で日本から持ってきた種をまいて実験しています。その後、うまく行けば、農業用の土地を借りて畑を広げたいです... 今回の災害で、是非、少しでも皆さんのお役に立ちたいです。私も、今後の放射線降下物質のことで、自分の長野の家族のことが心配です。私に何かできることなら何でも言ってください。まだまだ、自分のことを本格的な農家とは言えないですが、こんな私のできるのなら、被災農民の方のお手伝いしたいです。今の状態だと、募金くらいしかできなかったのですが、この機会にどうしてもお手伝いしたいです。私の家は小さいアパートで、今年の夏くらいに家が完成し、そちらに引っ越します。このような状態ですが、私の家に滞在していただいてもかまいません... 農家で自殺された方がいる、と聞いて、ショックを受けました... 少しでも良い方向に行くことを、応援しています。E」

Eさんだけでなく、日本人、フランス人のどちらからも、様々な受け入れ提案が届いた。奥さんが日本人で、小さな子供が3人いるシャルル氏は、労働力を必要としていて、日本の農家は大歓迎。AMAP産直をやっている、WWOOFの農業研修生を受け入れているムジェオ家は、研修はいつでも受け入れているが、被災農家が4人の子供たちに心理的悪影響を及ぼさないでくれればとの注つき。祖父母が農場を売りがっているというメールや、お茶好きの農協職員からのメールもあった。みんなが、支援を申し出ている中で、一通だけ「日本は資本主義国家でお金もちだ。そんな国が被災しても私は助ける気は全然ない。」と書いてきたフランス女性があった。

#### やり直しの被災農家支援プロジェクト

支援プロジェクトは、メールであちこち回り、いつの間にか、パリに本部のあるフランス財団の緊急支援窓口のマルタン・スピッツ氏の元にも届



いていた。日本はこれまで、災害の救急支援の対象になったことがなかった。スピッツ氏もハイチやソマリアなどへ駆けつけたことはあっても、日本を扱うことになろうとは思っていなかった。

フランス財団は、被災地支援に、高齢者、子供、農業者という3つの柱を立てた。その枠組みで、地域で活躍する市民のNPOに援助金を降ろすことを検討していた。しかし、NPOにも色々ある。公的基金を獲得するためだけのNPOだったり、会計管理のずさんなNPOもあり、うっかり支援決定が出来ない。アフリカへの緊急支援で、苦労した経験のあるスピッツ氏は、初めて扱う日本の被災地支援を慎重に準備した。支援の対象に第一次産業、特に農業を入れたのは、彼がAMAPに参加したりして、環境問題に以前から関心があったからだ。スピッツ氏は産直運動を推進する国際NPOのURGENCEI (Le réseau Urbain-Rural : Générer des Echanges Nouveaux entre Citoyens) に連絡をとり、私の支援計画を知ることになった。

パリの事務所では彼の話を聞いた時、被災者支援に強力な後ろ盾が出来たようで、私の計画に一層の弾みがついた。彼は、URGENCEIを通して、日本の有機農業関連のNPOにも支援案内を送っていた。有機農業運動の国際連合IFOAM (International Federation of Organic Agriculture Movements) と日本有機農業研究会に連絡を取り、計画を一本化して申請してもいいという。ただし、私の日仏交流牧場計画については、NONだった。財団に寄付をする篤志家たちに、受け入れてもらえない計画だという。外国旅行に見えてしまうそう。それよりも、日本国内に受け入れ拠点をつくるよう、案の変更を勧められた。

日本へ帰る直前に、胸を突かれるメールが届いた。福島の有機農家の自殺を知らせるニュースを知らせるものだった。

—2011年3月29日5時30分 福島の野菜農家が自殺 摂取制限指示に「もう だめだ」<sup>(17)</sup> 福島県須賀川市で24日朝、野菜農家の男性(64)が自宅の敷地内で首をつり、自ら命を絶った。福島第一原発の事故の影響で、政府が一部の福島県産野菜について「摂取制限」の指示を出した翌日だった。震災の被害に落胆しながらも、育てたキャベツの出荷に意欲をみせていたという男性。遺族は「原発に殺された」と悔しさを募らせる。—

私もこの知らせを転送しながら、無念でならなかった。安全な農業を営んで来た人ほど、福島の事故で受けた打撃は大きい。微力でも、支援したいと動いている私たちがいる。「生産者を放っておいた訳じゃない。もう少し待って」それだけでも伝えたかった。

4月4日、日本へ戻ってすぐ、下谷でお米屋さんをやっている砂金氏に電話入れ、福島へ援助物資を持って行くことを提案。私は、フランスで進



写真5 4月26日、農水省で夫の死を語る樽川さん

めた受け入れ計画を、出来るだけ早く、農家に直接説明したかった。砂金氏は、福島 of 農民連に亀田俊英という大学時代の友人がいる。「それなら、商店会の人たちに支援物資のせんべいや葉物野菜を提供してもらって、家の車に積んで行きましょう」と二つ返事で、7日に福島へ行く手配をしてくれた。

農民連は農協とは違う、農民たちの自主組織だ。どんな支援活動に取り組んでいるのか検索してみると、ホームページに「新規営農先の紹介」として、福岡、青森、千葉など8つの県からの受け入れ情報が載っていた。「いまは大切な郷土からは離れなくてはならないとしても、私たちは農を愛し、土を耕そうとするものを応援しています。被害に遭い、営農が困難になった方のうち、新たな土地で、再び農業を再開したい農家には、営農が可能な受け入れ先、農地などを紹介することが可能です。(2011年4月3日現在の情報)」と書かれていた。たとえばこんな風だ。

**福岡**：永続的に来てもらえるように3000m<sup>2</sup>畑を借りた、ここにきて一緒に作ろう。

**千葉**：産直センターで働くことも含めて、受け入れ可能です。

千葉県多古町の「多古旬の味産直センター」なら、よく知っている。電話をかけてみると、6日の時点では、まだ誰からも問い合わせがないという。センターでは、「しんの実空間」という広場の一角の和風家屋を提供するつもりで、仕事については、来た人の要望を聞いて考えるとのこと。センターで野菜の放射能汚染が出ていないかを聞くと、多古と佐原ではハウレン草に基準値を超える放射能が出て、政府から出荷停止令が出ているという。汚染農産物が出た土地は、耕作してはいけないと言われているので、補償してもらえるように、写真を撮って記録を残しているそうだ。センターでは東京や横浜から、ボックス野菜の注文が大量にある。その不足は他の野菜でカバーした

り、他の地域から取り寄せて補てんしている。事情説明の紙を入れているので、ここ2週間で辞めた消費者は3人だけ。励ましの電話も多くもらっているという。

### 亀田さんのいる福島へ

7日、砂金さんと8時半に品川駅の高輪口で待ち合わせた。砂金さんは車に梅干し、せんべい、割り箸、発砲スチロールの器、葉物野菜、毛布、下着などを満載。私はフランス土産のチョコレートやビスケット、ハーブティーなどを持ち込んだ。荷物で後ろが全然見えない。福島へ向かって車は順調に都内を抜ける。途中、那須高原のパークングエリアで昼食休憩を取った。周りにいるのは作業着姿の赤十字や消防署や自衛隊の人たちばかりで、なんとも異様な雰囲気だった。福島の近くまで来たら、西出口へ亀田さんが迎えに来てくれて、農民連の仮事務所になっている産直カフェへ先導してくれた。東京を出てから5時間半が経過していた。産直カフェの倉庫には段ボールに入った支援物資が積み上げられている。電話もファックスも動かないプレハブの事務所で、私たちは亀田さんの話を聞いた。亀田俊英氏は63歳、南相馬市の農家の長男で、母親(81歳)と二人で田んぼ2ha、畑2haの農業をやってきた。亀田



写真6 4月7日 砂金氏と福島へ

さんは2003年から福島農民連の会長をしている。3人の子供たち（男二人、女一人）は、それぞれ東京で働いているが、長男が定年退職したら後を継いでくれると思っていた。被災したのは亀田家だけでなく、井田川海岸沿いの農家に嫁いだ、妹さんの家も、津波ですっかり流されてしまった。

亀田さんが、地震の日のことを語った。

「地震が起きたのは、農民連が税金を集団申告する日だった。みんなで申告書を書き上げ、その会場から相馬市の税務署に移動している時に、ものすごい揺れが来た。それでも、とにかく申告を済ませて帰路に着いた。ところが、車が進まない。いつもなら1時間で帰れる所が、道路が混んでいて、2時間経っても家に着かない。鉄道の踏切の所まで来たら、向こうに津波が押し寄せて来るのが見えた。海みたいになっていた。妹からケータイに電話があって、津波で家が流されたという。家に戻ると、瓦が落ちたり、壁にひびが入ったり、家の中もめっちゃめっちゃだった。看護の仕事をしている妻が戻って来たのは5時半過ぎ。そのままでは寝られないし、地震がまたあったら怖いので、外のハウスの苗を置いてある所に寝ることにした。めい（妹の娘）が、勤め先の保育所の子供たちを全員送り届けて、夜8時ごろやってきた。めいはその時まで、実家が流されたことを知らなかった。妹の家族は、避難所へ7人で行っていた。その晩はとても寒い日だった。4人でハウスに寝ようとしたが、寒さと不安でろくに眠れなかった。次の日、妹夫婦が避難所からやって来た。家の中をみんなで片付けて、午後6時半、やっと夕食になった。ガスと電気は来ていたので、励まし合いながら、11人で焼き肉を食べ始めた。ちょうどその時、防災無線が、20km圏内に避難命令が出たことを知らせてきた。すぐに避難するか、翌日の朝を待つか、みんなで相談して、結局すぐに移動することにした。我々は郡山の妻の実家へ、

妹の一家は、同じ郡山の娘の所へ、車三台に分乗して出発した。」

亀田さんは、地震のあと、毛布を持ったりして、近所を助けに歩いたそうだ。家で炊き出しもやっている。周りの農家が、「オール電化」で困っていたからだ。その自分が、まさか避難所で助けられる側に回るとは思ってもみなかったと言う。福島の農民連の会員で、津波で自宅流された家は60軒、農地喪失80戸以上、農地半分以上喪失は10戸以上。原発20キロ圏内で避難させられた人は100人以上になるが、親戚や知り合いを頼って、みんなてんでんばらばらで、どこに誰が行っているのか、まだ把握できていない。

そばで聞いていた酪農家の見城さん。「春先、草が出る。ああ、トラクター持って来てうなりたいたいと思う。でも放射能のことを考えたらやるなど言われる。それは分かっているけど体が動きたくない。」と言う。福島も小規模な兼業農家が多い。定年で都会から戻る後継者を待って、高齢者がなんとか農業を繋いできた。「元気だと米作りは80歳まで出来る」と二人は声を揃えるけれど、「何にもしないで待っていたらみんな諦めてしまう」という危惧がうかがえる。農民連は、政府が震災を機に、諦める高齢者には補償を出して農地減らしを考えていると見ているのだ。



写真7 福島農民連の酪農家、見城氏



私の訪問目的は、砂金さんが予め亀田さんに電話で伝えてあった。せっかくフランスで準備してきた受け入れ先だ。とにかく話だけでも聞いてもらおうと、地図や資料を取り出した。「ブルターニュに行ってみませんか。しばらくでも、安全な所で農業を続けませんか。」そこにいた何人かは、話を聞いてくれたが、この時農民連の人たちの頭の中は、土壌調査のことでいっぱいだったらしい。手元にはガイガーカウンターが一台もなく、欲しくても手に入らない時だった。亀田さんの返事は、「危険というのは頭では十分理解しているけど、心がついていかない。地元を離れたくないし、家に戻りたい。とにかく汚染を自分で確かめたい」ということだった。私の唐突な申し出に対する、丁寧なお断りだ。

亀田さんは、福島農民連の会長として、どう仲間をまとめていったらいいのか思案をしていた。原発から離れて、余所に行かなくても、福島には耕作放棄地がたくさんある。そこへ移るのも一つの方法だ。誰かが先鞭をつける必要あるとも考えていた。でも、周りを見回しても、自分の心の中を覗いても、まだ時期尚早だと思っていた。みんななんとかもとへ戻りたいという気持ちが強い時だった。それを乗り越えてというところま



写真8 5月、ブルターニュの有機農場を訪問した亀田俊英氏（左から2人目）、村上真平氏

で、まだ誰も考えていないと彼は見ていた。

福島の農民連では、6月に農業視察にドイツへ行く予定があったそうだ。ドイツのエコヴィレッジを見て学ぶツアーで、見城さんは申し込んだというが、亀田さんは、「自分でわざわざお金を払ってまで、食べ物も合わない、言葉も通じない所へ行こうとは思わない。」<sup>(18)</sup>と言う。

この日、農民連の人たちの話を聞いてよく分かったのは、「農家は動かない」ということと、「支援は長いスタンスで考えるべき」ということだった。ブルターニュの農家については一つも質問が出なかった。よくよく頼まれたのは、フランスからガイガーカウンターを手に入れること。フランス行きに興味を持ってくれたのは、事務所に出入りする、応援の若者たちだけだった。彼らの笑顔に励まされて、砂金さんの車に乗り、東京に戻ったのは夜9時過ぎだった。

その晩、私は被災農家支援の新しい計画に取りかかった。フランス財団の緊急援助を降ろしてもらうには、向こうの基準に合うように計画を書き直さなければならない。日仏交流牧場のプランは、しばらく夢にしておいて、日本で被災農家を受け入れる交流村作りを始めよう。交流村の候補は色々ある。耕作放棄地と過疎に悩む村なら、日本中に散らばっているのだから。必要なのは、それを繋げて動いてくれる人材と、受け皿になって、基金を活かしてくれるNPOだ。動いてくれるようなNPOには、いくつかあてがあった。フランス財団とのつなぎ役は、私がボランティアで引き受ける。

こうして、「日仏交流牧場」の夢は、被災農家を受け入れる「交流村」作りを形を変え、支援活動は次の展開に入った。新しい支援計画を作って、福井を目指したのは翌8日。これが、NPO探しの第一歩だった。日本にはそれはたくさんの会がある。けれど、NPOと、任意団体とは別ものだ。市民が認可を受けて自主的に創るNPOに、



ボランティア精神を培う土壌とそれを支える仕組みがなければ、形はあっても実がない。この日から4ヶ月、フランス財団の基準を満たす被災農家支援のNPOを探して、私は日本の社会を探訪することになった。

## 結び

私は被災農家の支援活動の真ただ中で、行きつ戻りつしながら考えている。危険な地域に置き去りにされた農家があってはならないと思った。だから、知恵を絞り、足を使って、そこへ橋をかけ、外へつなげる道を拓く工夫を重ねてきた。

初めは橋さえかければ、あとは何とかなるものと思っていた。ところがそれは大間違い。「この村から出るなんてとんでもない」と、私の橋など見向きもされなかった。

どんな橋をかければ、思い切って渡ってもらえるのだろうか。福島の被災農家にアンケートをとってみた。そうしたら、「今の家と同じ家、同じ庭、同じ田んぼと畑のあるところがいい」という。「農業は続けたいけれど、他へ移るくらいなら、諦めてもいい」という。福島では4月から6月に自殺者が2割増え、仮設住宅には、朝から飲んだくれたおやじさんがいる。「あんたたちは、安全な場所において、勝手なこと言ってるだけだ」と意地を張る人の陰で、「一寸先の闇に苦しんでいる」、「毎日の生活が不安だ」と打ち明けて来る人がいる。

支援をしたいと思っても、方法か判らない。「僕はね、絶対に変わらないことっていうのはないと思う。あのベルリンの壁だって、取れちゃったんだから」と言って、笑う橋本慎司さんは、兵庫で有機農業に取り組む被曝2世。福島から動かない農家に「逃げてくれ」と声をかける。橋本さんの家では、お父さんが広島で被爆し、長く患ってきた。母方のお爺さんも原爆投下後の広島に入って、若くして亡くなっている。彼は福島を広島に

したくない。だから、福島 of 農民に「逃げろ」と言い続ける。でも、動きたくない農民に、無理強いをする訳ではない。人を村に縛り付ける暗黙の重圧を突き崩し、出て行く道があることを示してやりたいのだ。

二本松には、筋金入りの有機農家が根を張ってきた。その一人は菅野正寿さん(53歳)。「村を守り、次代のために今を耕す」ことを選んで、二本松で農業を続けている。有機の土壌を守り、農作物に放射能を吸い込ませないために、除染を繰り返す。彼は、除染のために植えたひまわりが、立派に花を咲かせるのを見て、「自分も放射能の前にひるまない」と、心を固めている。

もう一人は、長野県の上田に移住した丹野喜三郎さん(70歳)。40年前に、安全な農法で野菜を作りたいと、有機の道を選んだ。今は上田の農地を借りて、若い新規就農者たちに囲まれながら、自然の堆肥づくりを始め、すでにきゅうりは収穫にこぎつけている。丹野さん夫妻の決意は早かった。お孫さんが外で自由に遊べるように、放射能の心配をせずに、野菜作りに励めるようにと、丹野さん一家は二本松を後にした。

原発の事故の後、今、何かが変わろうとしている。人が生きることの意味を問われているのだ。福島の被災農家にとって農業は、一つの選択肢と



写真9 40年の有機農家、丹野喜三郎氏

なった。農業という土地に根ざした仕事が、先祖から渡されたお荷物ではなくなったのだ。

放射能の災禍は農家の営々とした営みを一度断ち切って、農民一人一人に、自分の生き方を選ぶ自由を与えた。農業を続けるのも辞めるのも、決めるのは本人だ。どこにくわを入れるのか、新しい里を選ぶのも本人だ。同様に、若い母親たちも、思いがけない試練に立たされることになった。産んだだけでは母になれない。母であるためには、生んだ子供の命を守る戦いに、有無を言わず駆り出されることになった。どこにかくまい、何を与え、どう守り抜くか、母の毎日は幼い命を守る聖戦だ。

福島事故は、人が人として真摯に生きる契機になったのかもしれない。農夫は選んで鋤をとり、母は子を守って母となる。私はその狭間で、行きつ戻りつしながら、福島の農家の命を明日につなぐ橋を架けていく。

## 註

- (1) 福島県須賀川市で有機農業を30年以上もやってきた樽川氏は3月29日に自殺。氏の自殺前後の話を妻の美津代氏が4月26日、農民連の農水省交渉の場で語った。「家の父ちゃんは地震のあとは元気だった。怪我した人はいないかって歩いてた。原発の映像見ながら落ち込んだ。被爆国がなんで原発認めたか。広島にも行って、そんな発言してきた。家の父ちゃんは原発に対する抗議で死んだ。」
- (2) 夫が2008年の秋、東京の日仏会館の現代日本研究センターの所長に就任。私もレンヌ第2大学を退職して同行。
- (3) フランスのメディアは、12日にはまだ原発の事故を報じていない。しかし、この時すでにアメリカやフランスの原子力開発機関では福島の救援対策が検討されていたのだらう。
- (4) NPO法人「田舎のヒロインわくわくネットワーク」1994年、山崎洋子氏を会長に、農業に取り組む女性たちの意識の向上と社会参加を促進するため立ち上げられた、農村女性をつなぐ会である。拠点は山崎夫妻が牧場を営む福井県坂井市。
- (5) フランスの農業人口は2000年のから2010年に130万人から96万6千人に減少、約26%減である。(2011年9月13日のOuest-France紙所収の国勢調査)
- (6) 2010年には年金制度の改革に反対して全国の5分の1の高校がストに入った。
- (7) チェルノブイリの原発事故とフランス政府の対応に関しては、Sortir du nucléaire (脱原発) という千近くのアソシエーションを結ぶネットワーク連合 <http://www.sortirdunucleaire.org/> のサイトにある「チェルノブイリ事故とその経過」に関する記録を参照。
- (8) <http://www.criirad.org/>
- (9) 「測定器47台プロジェクト - 全国47都道府県に市民の観測所を -」 <http://www.crms-jpn.com/>
- (10) <http://www.sudouest.fr/2011/08/12>
- (11) 農地を購入する場合は農業従事者である必要がある。
- (12) 1977年から2008年までレンヌ市の市長を務める。
- (13) 2011年4月20日の朝日新聞に載った氏の論説「人間らしさ万歳への共感」。
- (14) 池澤夏樹、『春を恨んだりはしない』5章、中央公論新社、2011年。
- (15) 7月11日には、東京で「子どもたちを放射能から守る全国ネットワーク」のキックオフミーティングがあり、8百名近いお母さんたちが参加。

- (16) *L'agriculture participative- Dynamiques bretonnes de la vente directe* (『分かち合う農業－ブルターニュに台頭する産直運動』), PUR, 2007、*Du Teikei aux AMAP- Le renouveau de la vente directe de produits fermiers locaux*, 『Teikei から AMAP へ－農産物の地産地消の新たな息吹き』) PUR, 2011.
- (17) <http://www.asahi.com/national/update/0328/TKY201103280468.html>
- (18) 亀田さんには、飯舘村の村上真平さんと一緒に5月にフランスへ同行してもらった。原発の事故以来、被災農家がどのような状況に置かれているか、二人が報告してくれた反響は大きく、雑誌や新聞に取り上げられ、今もフランスから二人の様子を問い合わせるメールが届く。